

令和 5 年 5 月 25 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K06282

研究課題名（和文）アグロ・メディコ・ポリスの形成とウェルビーイングの拡充に関する地域間比較

研究課題名（英文）Comparative Study by local and international level on 'Agro-Medico-Police' and improvement of well-being

研究代表者

池上 甲一（Ikegami, Koichi）

近畿大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：90176082

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：医福農連携の具体像としてアグロ・メディコ・ポリスを設定し、それが持続可能な地域とウェルビーイングの充実につながるといった仮説の実証とそのための条件解明を目指したが、コロナ禍のために本格的な実態調査ができなかったため、文献研究とオンライン研究会などによる理論化に重点を置いた。主要な研究成果は、アグロ・メディコ・ポリスの意義の理論的考察とその国際社会への発信、高齢社会におけるアグロ・メディコ・ポリスの可能性についての英文論文の執筆、アグロ・メディコ・ポリスの前提となる健全な農業・農村の担い手として小農・家族農業についての検討、アグロエコロジーによる農業・農村の健全性の向上の3点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アグロ・メディコ・ポリスは、高齢社会におけるウェルビーイングの向上を実現するための仕組み・実践であると同時に、成熟社会としての高齢社会の積極的意味を実現する機能を持ちえる。しかし、異なった原理を持つ医療・福祉・農業をどのように結びつけることができるのかについての研究は皆無である。本研究では、この点について、マルチ・ステークホルダー主義の考え方を援用するとともに、農村地域の経済的・環境的・社会的サステナビリティとSDGsの観点からの接近が有効であることを明らかにしている。これらの成果を海外事例との比較によって、政策的含意に結びつけることができれば、汎用性を持つことができる。

研究成果の概要（英文）：This study set up an agro-medico-polis model as a concrete image of medical-food-agricultural collaboration, and aimed to substantiate the hypothesis that this would lead to a sustainable community and enhanced wellbeing, and to clarify the conditions for such a community. Because of pandemic of COVID-19 virus, a full-scale fact-finding survey was not possible. Accordingly, emphasis was placed on literature research and theorizing through online study groups and other means.

Major research findings were as follows; (1) Theoretical consideration of the significance of agro-medico-polis and its dissemination to the international community, and writing an English paper on the potential of agro-medico-polis in an aging society, (2) Examination of small and family farming as a bearer of healthy agriculture and rural communities, which makes up a prerequisite for agro-medico-polis, (3) Improving agricultural and rural health through agroecology.

研究分野：農業経済学

キーワード：アグロ・メディコ・ポリス 高齢社会 ウェルビーイング 健全な農業・農村 小農・家族農業 農村サステナビリティ 緩和医療

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

農村地域では、日本に限らず世界的にも高齢化と都市への人口移動が進展している。その中でも日本の農村は、すでに高齢化が終了し、高齢社会に移行したと判断できる。その結果、地域社会の縮小、社会経済的機能の減退といった農村内部の問題にとどまらず、人口分布の不均衡や自然・生態環境の荒廃、自然災害リスクの増大、景観の悪化など国土全体にわたる悪影響が現実の問題として生じ始めている。

他方では、高齢社会は身体や地域社会に蓄積された知恵を活用して、抑制的な資源利用と落ち着きのある経済社会と親和的である。にもかかわらず、高齢社会が持つ後者の可能性を本格的に実証している研究は皆無である。高齢社会をサステイナブルな「成熟社会」として捉え、その意義を理論的にも実証的にも明確にし、その研究成果に基づく汎用性のある社会モデルを提示することが世界的にも求められている。

他方、福祉の分野ではこれまで主流だったウェルフェアからウェルビーイングへの転換が起きている。従来のウェルフェアは「弱者」を対象に物的・経済的な手段で「救済」するという性格を強く持つのに対して、ウェルビーイングは健康、生きがい、自信や誇りを自ら獲得していく主体的な動き（主体的福祉力）に重点がある。高齢社会では肉体的な側面では虚弱化を避けることはできないので、医療や介護福祉の必要性が高いし、疾病の罹患率も高くならざるを得ない。また死にも向き合わなければならない。ここに、緩和医療が注目される理由があるが、まだ個人対応の段階で、地域全体として取り組む仕組みは見えていない。地域レベルでの緩和医療の場として、アグロ・メディコ・ポリスは可能性を持つと考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、アグロ・メディコ・ポリスがサステイナブルな地域の形成と住民のウェルビーイングの充実につながるという仮説を設定し、国際的・国内的な比較研究によってそこに至るための必要十分条件を解明する。アグロ・メディコ・ポリスとは、農的福祉力と主体的福祉力に基づいて、医療、福祉介護、農業さらには食との間で結ばれた有機的なネットワークの上に成り立っている地域のあり方を指す。アグロ・メディコ・ポリスの形成は農的福祉力と主体的福祉力を強化する。

アグロ・メディコ・ポリスという考え方は、川上・小坂のメディコ・ポリス構想の提案（1988）に触発されて、1996年に『持続的農村の形成』において申請者が初めて使用した用語である。農業と医療・福祉を結びつけて地域形成を図るという視点は学術的な独自性であり、そこに緩和医療やアグリセラピーのような福祉関連農業サービスによる地域産業化の道筋を探るという研究方法はほかに例を見ないきわめて創造的な視点である。

本申請の研究を進めることによって、高齢社会＝成熟社会のモデルをアグロ・メディコ・ポリスというかたちで世界に向けて提言できる。ここに、実践的・政策的な意義がある。

## 3. 研究の方法

本研究ではフィールド調査が本来、中心となる方法であるが、研究の実施期間中は、数次にわたる新型コロナウイルスの感染拡大によって、アグロ・メディコ・ポリスの主要なアクターである医療機関・医療関係者への聞き取り調査が実施できなかった。このため、

当初予定していた国内の諸地域とアメリカおよびオランダの医福農連携に関する実態調査が実施できなかったため、実態調査に基づく仮説の検証は十分に転化することができなかった。その代わりに、アグロ・メディコ・ポリスの重要な前提条件をなす農業・農村の健全性についての文献研究と限定的な実態調査に力を注いだ。新規のフィールド調査地として、兵庫県丹波市を設定し、生き物調査や給食を通じたアグロ・メディコ・ポリスの形成に向けたアクション・リサーチを試みた。またオンラインによる研究会、ウェビナーなどに極力参加して最新情報の収集とアグロ・メディコ・ポリスに向けた理論化を図った。

#### 4. 研究成果

重点を置いた項目と成果は、以下のとおりである。

アグロ・メディコ・ポリスの意義の理論的考察とその国際社会への発信

アグロ・メディコ・ポリスは、高齢社会におけるウェルビーイングの向上を実現するための仕組み・実践であると同時に、成熟社会としての高齢社会の積極的意味を実現する機能を持ちえる。こうしたアグロ・メディコ・ポリスの可能性についての英文論文をオンライン・ジャーナルに発表した。

2021年度には、「Is Rural Japan Sustainable? Past, Present and Future of Community-based Endeavors」という国際シンポジウム（10月1日～3日、オンライン）において、農村のサステナビリティの観点から、「Can 'Agro-Medico-Polis' Give New Meanings to Rural Japan?」と題する口頭報告を行った。このシンポジウムの主催者はその結果を英語の単行本として出版することを意図していたが、厳しい出版事情の中でまだ実現できていない。出版の見通しがつかない場合には、完成原稿を国際ジャーナルに投稿する予定である。この論考では、医療・福祉・農業という異なった原理に基づく分野をどのように結びつけるのかという点について、マルチ・ステークホルダー主義の考え方を援用するとともに、農村地域の経済的・環境的・社会的サステナビリティとSDGsの観点からの接近が有効であることを明らかにしている。これらの成果を海外事例との比較によって、政策的含意に結びつけることが今後の課題である。

医福農連携という概念はかなり定着しつつあるし、またアグロ・メディコ・ポリスの柱である「ウェルビーイング」も広範な注目を集めるに至った。こうした社会状況の中で、「高齢社会における医福農連携の具体像としてのアグロ・メディコ・ポリス」とそれがもたらす「持続可能な地域の形成と住民のウェルビーイングの充実」がますます重要性を増してきていることを国際的に発信する意義は大きい。

なお、高齢社会における不可避の課題のひとつに、終末期のウェルビーイングやターミナルケア、および家族のグリーフケアがある。この課題について、トータルペイン研究会およびスピリチュアルケア学会に参加して継続的に情報を収集しているが、それをアグロ・メディコ・ポリス構想にどう組み込むかについてはさらなる検討が必要である。

家族農業と小農（peasant）についての理論的考察

アグロ・メディコ・ポリスが健全な農業・農村の上に成り立つ以上、その担い手である小農・家族農業についての検討が不可欠である。2019年度には、農業問題研究学会で欧米を中心とする小農研究の展開過程とその意義を発表した。また農業・農村の健全性の向上のためには、開発客体として扱われてきた農民を発展主体として捉え直す農業・農村研究が必要である。さらに、「持続可能な開発目標」（SDGs）の中核に家族農業・小農が位置

づけられることを明らかにした。

#### アグロエコロジーによる農業・農村の健全性の向上

健全な農業・農村を実現する際に、アグロエコロジーが有効な手段となりうる。この観点から、アグロエコロジーについての研究も進めてきた。2020年10月に「小農および家族農業をめぐる国際的動向と日本の現状」として日本有機農業学会で基調講演を行い、この基調講演の中から、アグロエコロジーに重点を置いた論文が同学会のジャーナルに掲載された。また、有機農業の経験を踏まえたアグロエコロジーの必要性について報告したFAO-Pacificの査読付きプロシーディングが刊行された。さらに、兵庫県丹波市において、健全な農業・農村環境の指標として「田んぼの生き物調査」を実施した。これはアグロ・メディコ・ポリス構想の検討に向けたアクション・リサーチの一環に位置づけることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 夏号
2. 論文標題 多様な担い手の可視化と意義づけ - モザイク的展開による地域農業と農村地域社会の新たな方向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊農業と経済	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 13-2
2. 論文標題 小農および家族農業をめぐる国際的動向と日本の現状：再小農化/新しい小農とアグロエコロジーの視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有機農業研究	6. 最初と最後の頁 12-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 14
2. 論文標題 日本におけるSDGsの到達状況と課題 - SDGsの経緯からみでの批判的検討」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 環境思想・教育研究	6. 最初と最後の頁 60-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 30
2. 論文標題 一国主義・技術主義の食料安全保障論から人々のための統合的食料安全保障論への転換 - 食料主権論との接合に向けて -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 農耕の技術と文化	6. 最初と最後の頁 221-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Ikegami	4. 巻 2022 Feb
2. 論文標題 The Characteristics of Modern Diets and the Shift to Agroecological Ways of Eating,	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Archives of Agriculture Research and Technology	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.54026/AART/1030	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Koichi Ikegami	4. 巻 2020(6)
2. 論文標題 Regional comparison on formation of Agro-Medico Polis and expansion of well-being	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Science Impact	6. 最初と最後の頁 49-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21820/23987073.2020.6.49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 305
2. 論文標題 「国連家族農業の10年」から考える 海外援助と国際協力	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 AGRIO	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 86(3)
2. 論文標題 食料貿易の新潮流とフードセキュリティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 6-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 41
2. 論文標題 SDGの成否は小農・家族農業が握っている	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊地域	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 56
2. 論文標題 国連「家族農業の10年」の枠組と農林漁業プラットフォーム・ジャパン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 42-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 28 - 1
2. 論文標題 SDGs時代の農業・農村研究 - 開発客体から発展主体としての農民像へ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際開発研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32204/jids.28.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 85 - 8
2. 論文標題 農林水産業からSDGsをどう読むか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 農業と経済	6. 最初と最後の頁 6-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池上甲一	4. 巻 41
2. 論文標題 SDGsの成否は小農・家族農業が握っている	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊地域	6. 最初と最後の頁 72-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 池上甲一
2. 発表標題 食料主権とアグロエコロジー
3. 学会等名 国際開発学会「倫理的食農システムと農村開発」研究部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Ikegami
2. 発表標題 Can 'Agro-Medico-Polis' Give New Meanings to Rural Japan?'
3. 学会等名 Is Rural Japan Sustainable? Past, Present and Future of Community-based Endeavors Virtual symposium (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Koichi Ikegami
2. 発表標題 What COVID-19 has revealed -From the Socio-economic Context of Japan
3. 学会等名 The Virtual International Conference: The Covid-19 Issues from Sociological Perspective of Asian Countries (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年



1. 発表者名 池上甲一
2. 発表標題 小農および家族農業をめぐる 国際的動向と日本の現状
3. 学会等名 日本有機農業学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Koichi Ikegami
2. 発表標題 Sustainable Agriculture and Rural Development: Considering SDGs and Food Sovereignty
3. 学会等名 International Seminar on Rural Sociology and Community Development（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 池上甲一
2. 発表標題 変質するグローバル化の下で農民主体論をどう構築するか：食料・農業・農村問題の再措定と実証分析に向けて
3. 学会等名 農業問題研究学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Koichi Ikegami	4. 発行年 2022年
2. 出版社 FAO & SEARCA	5. 総ページ数 307
3. 書名 Establishment of the Association of Western Japan Agroecology: Based on reflection of the history of the 'Teikei', direct partnership between producers and consumers, in Japan, in Proceedings of the Regional Consultation on Engaging with Academia and Research Institutions (ARIs) to Support Family Farmers and Food System Transformation During - and Post COVID-19 Pandemic in Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------